

## 北海道地区研究会

本年度の大会に向けて、六月二十六日、北大クラーク会館を会場に研究会が開かれた。当日は、北大教育学部の鈴木敏正氏（農業経済学）から「戦後農民層分解の基本動向について」と北見工大の白樫久氏（農村社会学）から「北海道村落研究の動向について」の二つの報告を中心に討議がなされた。当日の参加者は会員以外の方々も含めて十八名。以下はその報告と討議の要旨。

まず、鈴木氏の報告は、戦後の農民層分解論の基本動向とその主要な論点についての紹介があった。戦後の農業と農政の変化に規定されながら、農民層分解論が「中農標準化か両極分解か」という論議（一九五〇年代）を経て、「新中農層」の規定をめぐる論議

(一九六〇年代、七〇年代)に発展し、それが梶井氏や伊藤氏らの生産力論的分解論が盛かんとなった。しかし、七〇年代には、そうした潮流に対して、労働市場論的視点からの批判が出されてきた。そして、現段階での課題では、従来軽視されていた一、三、五層の兼業農民の農民的性格を明らかにすることが重要となっていることが指摘された。

次に、白樺氏の報告は「ムラ」がない(鈴木栄太郎)といわれる北海道の村落社会の研究の試みについて概括し、特に農事組合の成立を契機に「ムラの秩序」が創出され、それが北海道の村落形成の端緒となっているという布施氏の指摘、大沼氏らによる「農村集落研究会」が取組んでいる小作制大農場集落の研究の重要性などが取上げられた。その上で、減反、減産政策下での現段階における北海道農村社会分析の方法論模索がなされていることの指摘があった。

二つの報告の後、討論に入った。

まず、白樺報告にあった、小作制農場集落と農事組合型集落との関連について質問が出され、大沼氏からは、小作制農場集落研究の意図は、従来までの北海道を辺境論的規定ですませていることへの再検討を試みようとするものであることが述べられ、布施氏からは、小作制農場の場合も、その内部では農事組合による「ムラの秩序」の形成が村落形成の基礎となったとの指摘があった。

鈴木氏の報告に対しては、現段階の課題として提起された兼業農民的農民的性格の問題について意見が集中したが、鈴木氏は一、三、五規模層の兼業農家の場合、経営受委託に及ぶことなく作業受委託

が主で、その場合、受託農家と委託農家の間に農民的性格を変化させる要素はないと考えられると答えた。また、農政側から「集落」機能への着目されていることの意味などの問題についても意見が出された。当日、問題とされるべき論点について深まった討議がなされる前に時間切れとなった。特に現段階における北海道村落の構造的特質に関わる問題についての検討は今後に残された。